



特集

履正社バスケ、
「日本一」の裏側。

履正社バスケ、 「日本一」の裏側。

昨年8月、愛知県名古屋市で行われた「全国専門学校バスケットボール選手権大会」でバスケットボールコースが男女アベック優勝を果たした。これはチーム創設以来、初の快挙。高い競技力を持つ学生ばかりが集まっているわけではない本校が、全国を制覇できた理由はどこにあるのか。ある一日に密着した。



Photographs by Naohiro Kurashina

2月上旬、連日続いた厳しい寒さが少し和らいだ朝、集合まで30分以上あるというのに続々と学生たちが体育館へ集まってきた。「ギョッキョッキョ」とシューズの音を響かせ、シューティングや1対1に励む。9時になり軽いミーティングを済ませると、全体練習開始。ランニングやレイアップ、ドライブの練習など、ハードコート、フルコートを使い分けながら、多彩なメニューが息つく間もなく進められる。10時を過ぎる頃には、5対5の実戦練習に移っていた。「ペイントを守るために何を意識するの?」「ボールを持った時のディフェンスの状況は?」など、気になることがあればプレーを止め、選手に声をかけるのはコーチの浅村典正だ。練習後、1人の選手に話を聞いたのは、将来、地域リーグなどでプレーがしたいと練習に励む三添力丸さん。

「浅村先生は、ただ練習をさせるのではなく、自分たちで考えて取り組むことをすごく重要視されます。言われたことをこなすだけでは、いざという時の判断力や対応力が身につかないからです。プレーを振り返る際は、スカウティング(分析)の授業が活かされますね。シュート率やリバウンドを確認して、話し合いを重ねます。全国大会では、自分たちのバスケが結果に繋がったことがすごく嬉しかったです。また履正社は、大学や団体、地域リーグのチームと対戦する機会も多いです。レベルの高い相手とのゲームはとても勉強になります」

練習中の捻挫も、トレーナーが対応。

そんな三添さんが、その日の練習中に足首を捻挫。コートサイドで学生トレーナーからアイシングを受けていた。本校には、アスレティックトレーナーの資格取得を目指す学生も多い。バスケなど競技スポーツや医療の国家免許、英語を含めて自由にカスタマイズして学べる点が特徴だ。この日は、理学療法とアスレティックトレーナーの勉強を両立させている学生トレーナーが4名、練習に帯同していた。

学生トレーナーの指導員を務める小山幹生が言う。

「今は実習が始まって間もないので、僕が指示を出すことも多いですが、出番は段々少なくなりますよ」

理想は、教員の出番がないことだそう。テーピングを巻いたり、ケガをした選手にリコンディショニングを行ったりと実習は屋過ぎまで続く。

実技練習後は、ウェイトトレーニングの時間。ホワイトボードに書かれたメニューを、学生たちが険しい表情で黙々とこなす。指導者は、外部講師の藤元大詩先生だ。浅村の要望に応じてプログラムを作成。今の時期は週3日、上半身、下半身、全身とパート別に取組む。

「全国」は、人生で初めての目標だった。

女子チームの坂野春陽さんは、この1年で身体の変化を感じている一人。プレーでチームを牽引する存在の彼女だが、全国大会出場や、一位をめざすという目標を立てたのは、専門学校に入ってから初めてだそう。

「ここまでバスケットに集中できる環境は、人生で経験したことがないです。実技だけでなく、ルールを学ぶ授業もためになりますし、練習がきつい時も、トレーナーチームでマッサージやケアを受けられるので嬉しいです」

トレーナーチームを訪ねると、そこにいた鍼灸学科教員の高田麻佑子が説明してくれた。

「ここでは、鍼灸学科の学生が選手に対して鍼灸治療やストレッチなどを行います。主に慢性的な痛みや練習後の筋肉のハリをケアすることが多いです。其面キャンパスにも設置されているので、野球コース、ソフトテニスコース、サッカーコースの学生も利用できますよ」

日本一の裏側には、ハイレベルな指導だけでなく、手厚いサポート環境があった。指導者、トレーナー、医療など様々な分野のプロと日常的に接する経験は、競技者としてだけでなく、将来スポーツに関わる職に就く上でも、大きなアドバンテージとなるはずだ。



(左上)スカウティングの授業風景。試合映像を視てゲームの流れを細かく記録、対戦相手の分析に役立てる。(左中央)ウェイトトレーニングでは年間3回ほどスクワットやベンチプレスのMAXを測定。選手のモチベーションアップにも。(左下)競技復帰までサポートする学生トレーナー